

太田康資（太田資康） — 太田道灌の嫡男

太田康資（おおた やすすけ、太田資康（おおた すけやす）とも、1476年 - 1513年）は、室町時代後期から戦国時代初期にかけての武将で、江戸城主。江戸城の築城者として知られる太田道灌（資長）の嫡男であり、父の死後に家督を継いで江戸城主となった¹。太田氏は相模国守護・扇谷上杉家に仕える家柄（家宰）で、父・道灌も主君の上杉定正に仕えていたが、その卓越した才能ゆえ主君に嫉視され暗殺されている²。なお、後年に道灌の孫・太田資高の子として同名の太田康資（1531-1581）が存在するが、こちらは後北条氏や上杉氏に仕えた戦国武将であり、本項で述べる人物（1476-1513）とは別人である。

出自と家系

太田康資（資康）は文明8年（1476年）に、江戸城主太田道灌（資長）の嫡男として生まれた³。父の道灌は出生当時44歳で、それまで後継ぎがいなかったため複数の養子（太田資忠・資家ら）を迎えていた³。康資の母については不明だが、弟に日遵（にちじゅん）がおり、彼は出家してのちに相模国衣笠の大明寺住職となっている⁴。太田氏は清和源氏（摂津源氏）流の一族で、代々関東管領を補佐する重臣の家柄であった²。

父・道灌の代に太田氏は武蔵国の扇谷上杉家で重きをなし、道灌自身も家宰・軍師として活躍した。しかし文明18年（1486年）7月26日、主君の上杉定正により道灌は謀殺されてしまう²。康資はこのとき数え年11歳前後であった。妻は相模三浦氏当主・三浦道寸（義同）の娘であり、康資は道寸の娘を正室に迎えている⁵。子には太田資顕・資高・資貞があり、次男の資高（すけたか）の系統が後に江戸太田氏として近世大名（掛川藩主）にまで存続した⁶。※資高の子が太田康資（1531-1581）で、同名だが本項の康資とは祖父と孫の関係にあたる。

生涯と活動

幼少期と家督相続： 太田康資は幼少より父に従って江戸城で育ったとみられる。文明17年（1485年）12月、数え10歳で江戸城西側の平河天満宮において元服を行った⁷。折しも父・道灌と主君・上杉定正との関係が悪化していたため、康資は父の判断で定正と敵対する古河公方・足利成氏（室町幕府から関東に派遣された足利氏の一族）に「和睦の人質」として預けられた⁷⁸。これは万一の場合に備えて康資を匿う措置でもあったと考えられる。翌文明18年（1486年）7月、父・道灌が糟屋館（相模）で定正に謀殺されると、康資は古河公方の下から急ぎ江戸城に戻って家督を継いだ⁹。しかし、間もなく定正の追討軍が江戸城に迫り、康資勢は抗しきれず、康資は江戸城を脱出して落ち延びた⁹。康資一党は武蔵から西方へ逃れ、甲斐国まで退いたとされる。この江戸城からの脱出劇は「江戸城の乱」と呼ばれている⁹。

扇谷上杉家から山内上杉家へ： 長享2年（1488年）、扇谷上杉家当主の定正と、関東管領を務める山内上杉家当主・上杉顕定との間で内紛（長享の乱）が勃発する¹⁰。父を殺され自らも逐われていた康資は、この長享の乱で山内上杉顕定側に与して参戦した¹⁰。同じく定正と不和だった実兄の三浦高救（道寸の叔父）らと行動を共にし、敵対する定正方と戦ったのである¹⁰。この縁もあってか、康資は後に高救の孫娘（＝三浦道寸の娘）を正室に迎えることになった¹⁰（前述）。また、この頃、道灌と親交のあった禅僧・万里集九（ばんりしゅうきゅう）が康資を訪ね、慰問して句会（連歌・漢詩の会）を開いたとの記録が残っている¹⁰。父の非業の死とその後の波乱の中であって、康資を励ます文化人の来訪があったことを示す逸話である。

扇谷上杉家への復帰： 明応3年（1494年）、宿敵だった扇谷上杉定正が突然の事故死を遂げた¹¹。さらに同年、岳父（三浦道寸）が相模三浦氏の家督を奪還して勢力を盛り返すと、康資は扇谷上杉家への復帰を許さ

れ、定正の後を継いだ新当主・上杉朝良（ともなが/朝興とも）に再び仕えるようになった¹¹。復帰当初、康資は武蔵国北部の菅谷城（現在の埼玉県比企郡嵐山町）に在城したが、その後長享の乱が終結した永正2年（1505年）頃までには江戸城へ戻ったとされる¹²。道灌の死後、一時は没落の危機にあった江戸太田氏であったが、康資は約20年を経て江戸城と旧領を回復し、再び扇谷上杉家中で重臣の地位を占めるに至った。

北条早雲との戦いと最期：康資の後半生は、台頭してきた新興勢力の後北条氏（伊勢宗瑞＝北条早雲）との戦いに費やされた。長享の乱や主君定正の死で弱体化した扇谷上杉家にとって、北条早雲は大きな脅威であった。早雲は明応年間に伊豆国を制圧し、小田原城を奪って相模西部に勢力を広げていた¹³。相模国中部を本拠とする三浦道寸（義同）は扇谷上杉家の一門でもあり、北条の東進を食い止める最後の砦でした¹⁴。道寸は居城の岡崎城を早雲に攻められて劣勢となり、やがて三浦半島南端の新井城まで後退して籠城を余儀なくされる¹⁵。扇谷上杉家は縁戚でもある三浦氏を支援するため援軍を送り、康資も妻の実家（三浦氏）を救うべく出陣した¹⁶。しかし勢いに乗る北条勢に対し、かつての勢威を失った扇谷上杉方の抵抗は及ばず、康資ら援軍は次々と撃破されてしまう¹⁷。永正10年（1513年）9月、康資は相模国三浦郡方面で北条早雲軍と戦い、遂に討ち死にを遂げたと伝えられる¹⁸¹⁹。享年は37歳前後であった。

康資の戦死により、三浦道寸を助ける扇谷上杉方の望みは断たれ、三浦氏は孤立無援となった。道寸父子は新井城で籠城を続けたが、永正13年（1516年）についに落城し、三浦一族は滅亡している¹⁵。以降、関東における扇谷上杉家の勢力も衰退の一途を辿り、代わって勢力を拡大した後北条氏が古河公方をも圧倒していくことになる。

幕府との関係

康資の運命は、室町幕府が派遣した関東公方（古河公方）と上杉氏の対立とも深く関わっていた。父・道灌は主家への不信から、嫡男の康資を一時古河公方・足利成氏の下に人質として預けている⁸。これは関東管領上杉氏と古河公方が敵対関係にあった中で、道灌が古河公方側とも連携を図っていたことを示す。康資は1485年から翌1486年にかけて成氏の下に身を寄せ、父の死後に江戸城へ戻ったものの、上杉定正の追討を受けて江戸城から退去している⁹。その後長享の乱では康資は上杉顕定（山内上杉家）に仕え、古河公方もこれを支援した。古河公方・成氏は道灌の死後まもなく没したが、康資は引き続き関東管領上杉家の一員として後北条氏と戦い続けた。康資自身が室町幕府中枢と直接かかわる記録はないものの、彼の生涯は関東における幕府勢力（古河公方・関東管領）と新興大名（北条早雲）の抗争の渦中にあったと言える。

死後の評価と影響

現在の太田資康の墓（横須賀市・大明寺）。1981年に再建された五輪塔と隣に建つ「太田資康顕彰碑」（写真）²⁰。康資の戦死後、その遺体は弟の日遵が住職を務める大明寺（神奈川県横須賀市）に葬られたと伝わっている⁴。大明寺裏山の墓地には現在も太田資康の墓所があり、五輪塔型の墓碑と功績を称える顕彰碑が残されている²⁰。地元では江戸城主にして三浦道寸の女婿として討死した武将として、供養と顕彰の対象となっている。

歴史的に見ると、太田康資は父・道灌ほどの知名度はないものの、その死は当時の関東情勢に一定の影響を与えた。康資の最期により扇谷上杉家の軍勢力は一層低下し、三浦氏救援も潰えたことで、以後の関東は北条氏台頭の時代へと移行していった。また康資自身は若くして戦死したものの、その血統は途絶えなかった。長男の太田資顕や次男の太田資高ら子息は生き延び、子孫は後北条氏配下や他の大名家を転々としながら勢力を保った。江戸時代には康資の曾孫にあたる太田資宗（すけむね）が大名となり、太田氏（江戸太田家）は遠江国掛川藩主などとして幕末・明治維新まで存続している⁶。このように、道灌の直系は康資を経て近世まで残り、太田道灌の業績が後世に伝えられる一因ともなった。

伝承・逸話

太田康資にまつわる逸話としては、まず**幼少での元服**が挙げられる。文明17年（1485年）12月、康資はわずか10歳にして江戸城平河天満宮で元服の式を行った⁷。これは父・道灌が健在なうちに嫡男に後継としての箔を付け、周囲に示す意図があったとも考えられる。実際、この元服直後に康資は古河公方足利成氏の許へ預けられており、道灌が我が子を政治的に活用しようとした様子が窺える⁷。『梅花無尽蔵』など当時の記録にも、康資が元服した際の様子が記されていると伝わる。

父・道灌の死に際して康資が残した行動にも伝承がある。道灌が殺害された翌年の文明19年（1487年）に、康資は江戸城を去る前に父の一周忌の法要を執り行ったとされる（『梅花無尽蔵』所収の記録）²¹。幼いながらも父の菩提を弔い、そして生き延びるために江戸を離れた康資の姿は、後世の軍記物などでも語られることがある。また前述のように、長享の乱の折には万里集九という僧が康資を訪ねて慰問し、連歌の会を催した逸話が残る¹⁰。乱世の只中であって文化的交流が行われたことを示すエピソードであり、道灌父子の教養人脈を物語るものと言える。

一方、父・道灌にまつわる有名な逸話（山吹伝説など）は**康資自身の伝承ではないが**、江戸太田氏が江戸時代に編纂した『太田家記』にはそうした逸話が載っておらず、後世の脚色とも指摘されている²²。康資に関連する伝説としては、江戸城脱出の際に道灌の怨霊が康資を守ったというような怪談めいた話も伝わっていないわけではないが、史料的な裏付けは乏しい。

関係史料

太田康資について言及する**古文書・記録**として、いくつかの史料が知られている。

- ・『**梅花無尽蔵**』（ばいかむじんそう）：禅僧・万里集九が関東各地を遊歴した際の漢詩文集（1506年成立）。文明17年の康資元服や、文明19年の道灌一周忌の様子が詠まれているとされる²³。
- ・『**太田家記**』：江戸時代中期に江戸太田家（掛川藩主太田家）が編纂した家譜・軍記。太田道灌とその子孫の事績をまとめたもので、康資が永正10年（1513年）に三浦合戦で戦死したことなどが記されている¹⁸。
- ・『**年代記配合抄**』：戦国期の年代記を江戸時代に整理・補完した史料。長享年間の記事の中で「太田六郎右衛門尉」の死について触れており、この六郎右衛門尉を康資に比定する説がある。それによれば、康資は永正2年（1505年）に主君・上杉朝良によって中野の陣中で誅殺されたと解釈される¹⁸。ただしこの人物比定には異論もあり、通説とはなっていない。
- ・『**赤城神社年代記**』：武蔵国川口の赤城神社に伝わる年代記録。明応7年（1498年）の条に「太田源六生涯」との記載があり、これを康資（通称・源六）の死去と見る説がある²⁴。この場合、康資は1498年頃に没した計算になるが、他の史料と整合せず疑問が残る。
- ・**書状・日記類**：太田康資個人の発給した書状はほとんど残っていないが、父・道灌の書状（「太田道灌状」など）や太田氏関連の古文書にその名が現れる場合がある。また万里集九の残した日記や漢詩文、山内上杉家家中の記録類（『永正記』等）にも康資に関する言及がわずかながら含まれている。さらに江戸時代には康資の末裔にあたる英勝院（徳川家康側室）による寄進状など、太田氏の系譜を伝える史料も存在する。

以上のように、太田康資に関する情報は限られているものの、父・太田道灌の功績や江戸城の歴史と相まって、その生涯や事績は複数の史料によって断片的に伝えられている²⁵。今なお地元史研究や戦国史研究の中で注目される存在であり、同時代の関東の動乱を語る上で欠かせない人物の一人である。

参考文献・出典: 太田道灌と太田資康に関する記述は、主に太田氏の家譜類（『太田家記』等）や戦国期の年代記、『梅花無尽蔵』所収の記録に基づく。また、現代では『太田道灌（人物叢書）』などの伝記や地方史研究書に康資の動向がまとめられている。本文中の引用は特に注記のあるもの以外は以下に拠る：¹²⁶²⁷⁴⁸⁶。

¹²⁴⁵¹³¹⁴¹⁵¹⁶¹⁷¹⁹²⁰ 太田資康の墓 | 妻の実家・相模三浦氏を助けるため討死した江戸城主の墓所

<https://miurahantou.jp/oota-sukeyasu-bosho/>

³⁷⁹¹⁰¹¹¹²¹⁸²⁴²⁵²⁶²⁷ 太田資康 - Wikipedia

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%AA%E7%94%B0%E8%B3%87%E5%BA%B7>

⁶⁸²² 太田道灌 - Wikipedia

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%AA%E7%94%B0%E9%81%93%E7%81%8C>

²¹ 太田道灌の后世 - 百度知道

<https://zhidao.baidu.com/question/1991456297402257227.html>

²³ 太田資康（おおた・すけやす） 1476?～1498? - BIGLOBE

<http://www7a.biglobe.ne.jp/echigoya/jin/OotaSukeyasu.html>